

絶望ピアノ 負ふ会



二〇〇八年三月二十日 十四時開演

in

三和ミュウジックサロン

※御注意：大変申し訳ありませんが、都合により「ひとこと」の一部をカット、編集させて載いてる場合が御座います。悪しからズ御了承下さいませようお願い申し上げます。

開会 ～プロロウグ

第一部

■straysheep

ピアノソナタ第7番 Op.10-3 第2楽章 ベートーヴェン

冒頭の表現記号からして“Largo e mesto（ゆっくりと悲しげに）”第1, 3, 4楽章はニ長調でベトベンにしては珍しく明るい曲調なのに、第2楽章だけはニ短調でどーんと暗く、正にベー様の真骨頂。まるで、他楽章の明るさに1曲で対抗しているかのようです。

■fermata

『こどものためのアルバム』より「病気のお人形」「人形のお葬式」 チャイコフスキー

“縦縞すりガラスカバーのついた黄色いバイエル”の最後に載っていた憧れの曲は、「新しいお人形」。バイエル終了後しばらくして進んだこの曲集で、その前に実はこの2曲が存在することを知り、「なんだ！お人形死んじゃったけど、すぐ新しいの買ってもらったもんねー！るるん♪って曲だったのかよ！」と子供心に思ったものです。

■らっきー

インヴェンション第2番 J.S. バッハ

バッハの短調の曲を暗く弾くのがサイコー。でもインヴェンションしか弾けない自分に絶望。

孤独な松の木 シベリウス

シベリウスの孤独な松の木は、何故か僕に凄く似合うと言われます。自分のキャラに絶望？！

■ごえすかす

ピアノソナタ第2番「葬送」Op.35 第3楽章 ショパン

災厄続きで絶望度数もピーク。今こそ、葬送行進曲を弾くべき時だあ！

コラール ごえすかす

コラールは哀れな自分を慰めるべく今年の冬に作曲しました。短い曲です。

休憩

第二部

■juncoco

ピアノソナタ第12番 Op.26 第3楽章 ベートーヴェン

絶望話はたくさんありますが、一番の絶望は両親の死ですから・・・

■デーゴ

マズルカ ヘ短調 Op. 68-4 ショパン

ショパンの絶筆。白鳥の歌。病床のショパンは、この曲をピアノで弾くことができずに一生を終えてしまった、という悲しい言い伝えもあり。それより何より、どよよ〜んと暗いコード進行に 学生時代のデーゴはゾッコン惚れてしまったのです。(当時、楽譜を買いに行く足より、採譜する手が先に動いてしまった)

■clala_16

ピアノソナタ第2番 Op. 22 第3楽章 シューマン

冒頭と最後のメロディが悲劇的で、後半の高音と重低音の掛け合い部分も暗くて激しいスケルツォの楽章。個人的に四楽章ある中でも一番短くて暗くて激しくカッコよく一番早くちゃんと弾けるようになりたい楽章だが、構成の順番的になかなかレッスン対象として辿り着けず絶望中。

■ごるびー

ノクターン第13番 Op. 48-1 ショパン

作曲された時期がショパンにとっては大変辛かったためか、彼のノクターンの中で最も悲劇的な作品と言われています。文句無しに暗いです。練習している時も気が滅入ることがしばしば。最後の和音なんかはまさに「絶望」という感じです・・・

前奏曲嬰ハ短調 Op. 3-2 ラフマニノフ

絶望的な和音がドーン！！

■けんぷ

夜想曲第13番ロ短調 Op. 119 フォーレ

フォーレ最後のピアノ曲であり、70歳を越えてから、難聴と戦いながらの作曲されたものである。フォーレは、優美で哀愁を帯びた旋律の歌曲や宗教曲で知られるが、人生が優美で平穏だったかという、どうも、そうでもなかったようだ。1900年を過ぎて、巴里音楽院長に就任するや、因襲と戦い、多くの刷新を行ってきたし、また、身边は、多くの色模様に彩られ、これはこれで激しいものだったようだ。ノクターンの13番には、そういった情熱を回顧しているようにも思われる。単純なようで十分に難渋、哀愁に富む旋律の重畳で、いつのまにか、深淵を覗いているようなものである。

休憩

第三部

■clala_16

ノルドロークのための葬送行進曲 グリーグ

ノルウェーの熱狂的な民族主義者で、ノルウェーの国家の作曲者、ノルドローク(1842-1866)(若い若すぎる・・・)の訃報を受けて 1866 年に作曲され、コペンハーゲンにて 1866 年に出版されました。 グリーグは、これ以前に《ユモレスク 作品 6》もノルドロークに捧げています。この葬送行進曲は、グリーグの願い通り、グリーグ自身の葬儀の際に演奏されました。 。°・(ノ 厶)°・。

■ゆかとー

エチュード Op. 8-12 「悲愴」 スクリャービン

去年、サークルの定演で弾いて、それはそれはさんざんな出来でした。

『叙情小品集』より エレジー グリーグ

そんな暗い曲でもないのだけど、タイトルのありがたかな、と。

■わたり

前奏曲ロ短調 Op. 32-10 ラフマニノフ

テーマは「帰郷」(ラフマニノフ談)。帰郷は帰郷だけど、なんかこう、帰りたくても帰れない事情があるとか、行く時に一緒だった人が帰る時にはいないみたいな。そんな感じがします。今調べてみたら、ロシアに帰れなくなった年よりもずっと前に作られた曲で、早速帰れない事情説アウト→絶望 そしてなにより、ラフマニノフ前奏曲から抜け出せない🌀→絶望 モスクワ、物価高いことを知る→絶望(行ってみたかった)

■mary

アルビノーニのアダージョ アルビノーニ

両親が葬式の時にかけてと…(苦笑)

ソナタ第 14 番「月光」 Op. 27-2 第 3 楽章 ベートーヴェン

■ヨーコ

6つの小品 Op. 118 より 第6番 ブラームス

晩年の作品。生涯結ばれることのなかった愛する女性クララ・シューマンへ捧ぐ。クララに絶交宣言され、起死回生の策として、1892年のクララの誕生日に作品 118 のピアノ小品6曲を添えて許しを請う。和解はするものの、ブラームスはクララをその手で抱きしめることなくこの世を去る。この曲集の最後である第 6 番は、切なき絶望が詰まっています。私にとっては、ピアノを本気でやめようと思ったときに会った曲です

『詩的で宗教的な調べ』より 葬送 リスト

処刑されたハンガリーの勇士のための葬送曲らしいが、も〜出だしから絶望的な不協和音。この曲との出会いは、学内試験でリストのスペイン狂詩曲を弾こうともくろむが間にあわず、急遽この曲に変更したという経緯が。先生は「平気平気〜w」とのん気だったが、急遽で弾ける曲じゃないっつーの！マジであの時の演奏には絶望した！ 温かい言葉はかけていただきましたが、大好きな青柳晋さん(ただのミーハー)の前で撃沈するとは・・・やるせない

休憩

第四部

■夜毎屋

ピアノソナタ 1905 年 10 月 1 日 (1. X. 1905) 路上にて 第 2 楽章「死」 ヤナーチェク

作曲者唯一のピアノ・ソナタ。20 世紀初頭、ドイツ系住民支配下のチェコで民族運動が高まった。この曲は「チェコ人のための大学を」というデモに参加した、モラビアの労働者が殺された事件に衝撃を受けて作曲されたもの。第 1 楽章は『予感』と題された陰鬱な印象をもち、2 楽章は「死」という標題で、射殺された若者をいたむ内容といわれる。当初 3 楽章が存在したが、作曲者自身により、暖炉にくべられて消失してしまった。ヤナーチェクは気性の激しいことでも知られ、気に入らない自作を燃やしてしまうことも度々であったという。(ピティナピアノ辞典より)

タイトルからして絶望負ふに相応しい曲です。間に合わなくても1番弾きたかった曲を弾いてしまえ！と、絶望というよりヤケでエントリーです。最初の和音から10度、次も10度と続き、弾くだけでも絶望的。。。でもこの空虚なオクターブがたまりません！！

■shig

『夜のガスパール』より 絞首台 ラヴェル

あまりの臨時記号の多さに絶望した！

■かとしん

『アンネの日記』より「アムステルダム之夜明け」「ハヌカー」「if」マイケル・ナイマン
アムステルダムからアウシュビッツ、そして儚い青春を終えるまでの旅にお連れ致します。

■かなこ

楽興の時 Op. 16-3 ラフマニノフ

乗り合わせた列車でスリに合うという災難に見舞われ、経済的に困窮している中お金の必要に迫られて作曲されたという「楽興の時」全 4 曲。その中から、今回は特に暗くて悲痛な 3 番でエントリーします。届かない和音の数々に、自分で絶望しそうな予感をひしひしと感じています。。

閉会 ～エピロウグ

【配役】

絶望のピアニスト、あるいは絶望先生／企画（かとしん）

冥土さん（かなこ）

謎の和服美人（juncoco）

絶望の魔女（clala）

じょしこーせー／脚本（夜毎屋）

絶望の悪魔？（ひつじ）

マッドサイエンティスト／演出（shig）

■痛快読み物

3 大B 絶望の系譜

寄稿：けんぶ

大バッハの生涯は、謹厳実直なオルガニスト兼作曲家として、どちらかというと安定した生涯を送ったようである。ワイマール、ケーテン、ライプチヒと渡り歩き、亡くなるまで27年間、ライプチヒの聖トマス協会カントル（合唱長、音楽監督のようなものだったらしい）の地位にあった。そのころの協会オルガニストやカントルというのがどの程度の生活レベルだったか定かではないが、それなりに安定し尊敬を集めたものであったことが想像できる。作曲家としてはともかく、超絶技巧のオルガニストとしては、バッハの名声は広く知れ渡っていたし、バッハの二番目の妻、アンナ マグダレーナは、すぐれた音楽家であり、バッハの創作を助けたらしい。すぐれたソプラノ歌手を奥さんに芸大学長を30年続けるようなものだろうか。

しかるに、いきなりの増四度の下降ではじまり、半音階的上昇と崩落が交差するような、口短調ミサの主題、それに続くキリエのフーガからは、実直で地位のある音楽家の姿は想像できず、協会の地下、地獄に続く階段を静に下りていくような印象を受けるのである。ここまで大規模な曲でなくても、平均律1巻22番の5声フーガ、ひたすら清澄に下降していく主題の連鎖に、バッハの内面を見るような感覚を覚える。なぜか。

バッハは子沢山であった。一番目の妻の子供が7人、アンナ マグダレーナの子供が13人、しかし、成人したのは、わずか10人で、そのうち一人は、成人後に若死している。子沢山、というよりも、10人の子供を亡くしたことを驚く。亡くなっても次々に妻に子供を産ませた執念は、どこから来たかと思うのである。

長じた息子の中には、それなりの音楽家も居る。ヨハン クリスチャン バッハ、カール フィリップ エマニュエル バッハは、今でも、音源も楽譜も容易に入手することができる。驚くことに、当時、息子たちの作曲家としての名声は、大バッハを凌いでいた、との説もある。晩年になり、どんどん複雑怪奇になっていく大バッハの対位法が、いかに教養がある階級であっても、当時の貴族や民衆に受け入れられたとも思えず、単純明快な息子たちの音楽が大衆受けしたことは、充分に想像できる。大バッハは、たぶん、作曲家としての息子たちとの力量の差を把握していたであろうが、また、自分の生涯を賭けた対位法の時代の終焉を、どこかで悟っていたかも知れない。

晩年のバッハの作品、フーガの技法や音楽の捧げもの、には、対位法のあらゆる技法が詰まっているが、その、救いのなく暗い主題の交錯から、天才の深い絶望を聞き取ることができる。夭折した11人の子供の声か、迫り来るモノフォニーの時代への絶望か。

パパ ハイドンが生まれたのは、バッハがまだ40代の頃だが、バッハが没して6年後にモーツアルトが、20年後にベートーヴェンが生まれ、時代は徐々に古典派の時代にはいっていく。ベートーヴェンは、50年の生涯で、一気に、ロマン派まで走ってしまった。

ベートーヴェンの音楽は、しつこい。たいへんに、しつこい。「運命」交響曲など思い浮かべてもらえばいいと思うが、さあ、再現部が終わるぞ、盛り上げるぞ、どうだもう一丁だ、さあどうだ、もうひとつだ、と延々とコーダが続くのである。あのI楽章の主題も、この曲ではじめて出現したものではなく、遠く、5番ソナタの3楽章に、近くは熱情ソナタに、片鱗を見ることができる。

この「しつこさ」は、後期になってさらに極端になり、ハンマークラヴィールソナタ、ディアベリ変奏曲、そして、究極の誇大妄想的宗教音楽であるミサ ソレムニスに結実するのである。第九交響曲とミサ ソレムニスを比較してみると、充分に巨大な第九のほうが、子供のように見える。これほど複雑怪奇、長大な曲をつくる必要があったか、彼の内的欲求はなんだったか、つまりらかではないが、演奏時間80分、一聞で理解できる曲でないことだけは断言していい。それでは、この曲は、ベートーヴェンの生涯の結実といえる傑作だろうか。そのポリフォニーは、ときに豪華絢爛、ジャカスカ鳴り、ラテン語の敬虔な詩におよそふさわしくない、アーとかオーとかいう感嘆詞がつけられ、それでも、その精密さにおいてバッハに及ばず、巨大でも絢爛でもないが人の魂を直接ゆさぶるような、モーツアルトのレクイエムの冒頭、キリエの人声フーガのようには、心に響かないのである。

この曲の作曲中に、おろらく煮詰まってしまって気晴らしをするために、作曲されたのが、作品109、110、111という、至高のピアノソナタ群である。こちらは、演奏時間20～30

分、複雑でないとは言わないが、人間の感性に直接訴える曲であり、常人の記憶と集中の範囲内ではある。これらのピアノソナタを理解するためにミサ ソレムニスを理解する必要があるか、たぶんあるのだろうが、そのまえに、私など、どうも辟易してしまう。

ミサ ソレムニスの初演は1824年にサンクト ペテルスブルグにて行われたが、評判はさんざんだったようである。初演の後のディナーにおいて、ベートーヴェンは、自分の作品が受け入れられないこと、すなわち、演奏会収入があまりに少なかったことに、悲嘆慷慨し、友人たちに当たり散らしていただいたらしい。それまで、ベートーヴェンが成功を確信していたらしいが、ひそかに、大バッハやモーツアルトと自分を比較して、後半生を賭けた曲の失敗に、気づいていたのかもしれない。

ベートーヴェンの音楽上の粘着に比較して、その生活は、このように、なんとなく、俗っぽいのである。彼が生涯独身であったのは有名だが、自分はまともな家庭をもてないと悟ると、甥のカールに、父親のような慈愛を持った接し方をする。しかし、これがまたロクでもない男で、ベートーヴェンの貧窮の原因をつくり、彼をずいぶん悩ませたようだ。俗人の一面と、超人的に執着的な音楽と、どちらが仮面だったか、今となっては知る由もない。

ミサ ソレムニスは、どうやら、一度、部分的に再演されただけ、のようである。その後、急速に体力を失い、貧窮の中に、ベートーヴェンは、ボンで亡くなる。彼の天才は、たぶん自分の才能を知っていたと思うが、最後の賭けだったミサ ソレムニスに失敗し、あろうことか俗っぽいロッシェニなんぞが名声を博している状況の中、深い絶望とともに息を引き取ったと想像している。せめてもの救いは、友人たちに囲まれ、市民に惜しまれてなくなったことだろうか。

ブラームスが誕生したのは、ベートーヴェンの没後6年目である。ついでに言うと、ショパンも、リストも、シューマンも、ブラームスより20歳以上年長である。(この3人の生まれた順番、わかります? どうでもいいけれど)

ブラームスを世に出したのは、ロベルト シューマンだといっても過言ではないのだが(1853年に、自分の雑誌で、天才の出現と紹介している)、ブラームスの生涯は、むしろ、クララ シューマンとともにあった、といっても過言ではない。ブラームスは、シューマンの3女との失恋などもあったらしいが、10台にシューマン夫妻の競演(コンチェルトだったと思われる)を聴いて、イカれてしまっただけは、クララ一筋、であった。これが、恋愛関係だったのかどうか、つまびらかにはなっていない。恋愛関係でなかったからこそ、何十年という関係が続いた、とも考えられなくもない。しかし、ならばなぜ、音楽家としては奇跡的に名誉に包まれながら、独身を通したのか。

ブラームスの生涯には、このような、踏ん切りの悪さがつきまとい、行きつ戻りつ区切りのないようなフレージングを生み出しただろうし、古典との決別もできなかった。若書きの3曲のソナタや、作品4のスケルツォに比較して、作品118や119の組曲は、複雑にはなっているが、底流を流れてい絶望感、何も変わっていないような気がする。

たとえば、作品10のバラード。第一曲、エドワードは、父を殺した息子と母の対話、という救いようのない題材で、音楽は陰陰滅滅、爽快感のかけらもない絶望的な音楽である。作品118の寂寥感を遠く予感させるような。

ブラームスは、フランツ リストを訪ねて、その、過度に文学的装飾された音楽にがっかりして、距離を置いたらしい。しかしながら、その後、ワーグナーやリストの一派と対立し、古典の巨頭のように祭り上げられたのは、ブラームスの本意ではなかったか、と感ずることがある。これも、うじうじぐずぐずしているうちに、反ワーグナー派に祭り上げられえしまった、ということかもしれない。これが、彼自身の音楽に、なにか自縄自縛のような窮屈さを与えた原因かもしれない。彼がシューマンやクララと精神的に決別していたら、いや、それはもはやブラームスでなくなってしまう。

華やかな女性関係に彩られたドビュッシーは、内面にオカルティックな暗黒を抱えていたことは、最近の、青柳いずみさんの著書で広く知られることになった。巴里音楽院に長く君臨し、美しいメロディーに彩られた名曲をものし続けたフォーレも、実は艶福家で、離婚結婚騒動は起こしているし、相当危険なロ●コンであったが、晩年は耳疾に悩むこととなった。グンディで知られたラヴェルは、ある日突然、一小節も音楽を書けなくなってしまった。しかし、バッハ、ベートーヴェン、ブラームスの闇に比べれば、なんとなく、親近感を覚えるのである。少なくとも、ボードレールやランボーほどは、破滅的人生ではなかった。地域性によるものか、時代なのか、それは、よくわからない。(了)

生まれて

すみません

太宰治